言語の身体化——狩猟採集民グイの身ぶり

菅原和孝（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）
Kazuyoshi SUGAWARA

1949年東京生まれ。京都大学大学院理学研究科博士課程修了。京大理学博士。京都大学大学院人間・環境学研究科教授。霊長類学から出発し、1982年よりボツワナの狩猟採集民グイのもとで身体性に注目した人類学の研究を続ける。2000年から静岡県水窪町で民俗芸能の伝承過程を調査。主著に『身体の人類学』（河出書房新社）、『語る身体の民族誌』『会話の人類学』（共に京都大学学術出版会）、『感情の猿＝人』（弘文堂）、『ブッシュマンとして生きる』（中央公論新社）、『ことばと身体』（講談社）など。

1 「身体化の人類学」へ向けて

人間の生は、他の動物たちと同じように、身体によって世界に根をおろしている。このことを身体化（embodiment）という。あまりにも当たり前のことなので、それはむしろ思考の暗点となりがちだ。逆に、近代の私たちが囚われているのは心身二元論と呼ばれる考え方である。それによれば、心と体は別個の実体である。非物質的な精神こそが人間性の本質であり、自己は理性によって「心の容器」としての体を統御しうるという。だが、30年ほど前から認知科学と総称される領域で、「身体化された心」（embodied mind）という考え方が脚光を浴びるようになった。心の働きは身体の構造と経験とによって根本的に制約されている。感官や欲望から切り離された透明な精神が外界を客観的に認識するという自然科学の前提は疑わしい。人間は世界の内部から現象を了解するのである。このような見方は、フランスの哲学者メルロ＝ポンティが切り拓いた身体性の現象学を源流としている。

ただし、「身体化された心」という言い方もまた要注意である。「身体」と「心」という2つの概念を並列した途端、二元論の誘惑が忍び寄ってくるのである。「身体化の人類学」は、心という目に見えぬ「幽霊」が身体という「機械」の内部に棲んでいるという捉え方に疑義を呈し、人びとが身体として直接的に関わりあう様態を精確に記述することを出発点とする。そこから、人間の社会性が生成する機序を照らし出すことをねらっている。

2 身ぶりとことば

コミュニケーションとは何か

ドイツの社会学者ルーマンは、社会とはコミュニケーションという出来事を構成要素とするシステムであると考えた。一般的に、コミュニケーションの代表は言語的なやりとりであると考えられている。心に浮かぶ想念（より広くは表象）を幼児期から習得してきた意味論と文法に従って日本語の文に変換し、それを発話や文字媒体によって相手に届けるというわけだ。このとき、口や舌や喉は心的表象を外化するための道具にすぎないし、「本当の私」は外界から隔絶した心という砦の中に閉じこめられていることになる。

だが、コミュニケーションの本質を心的表象（あるいは情報）の交換に求める見方はあまりにも偏っている。たとえば、私の長男は自閉症者だが、子どもの頃は意味不明の「口ぐせ」を私に復唱させることを楽しんでいた。このやりとりのどこにも「情報の交換」など含まれていない。それは、2人が手をつなぎあうのと同じような交流と感じられた。

文字が発明されたのは古代文明の成立以降である。それ以前の人類のコミュニケーションの原型は直接的な対面相互行為——すなわち「会話」にこそ求められる。会話において人は単に「ことばを交わす」のではない。ひっきりなしに腕や手や頭や肩を動かし、相互行為に全身で参入している。そこでは発話と身ぶりとはつねに車の両輪のように駆動している。自閉症の少年とその父親との関わりにおいて「手をつなぐ」ことがかけがえのない輝きを帯びていたのと同様に、会話の持続を共有することを通じて身体どうしが「つながりあう」ことこそ人間のコミュニケーションの基本的な姿なのである。

身ぶり研究の重要性

西欧思想のなかで身ぶりへの関心は長い歴史をもっているが、現代へとつながる体系的な理論枠は、1960年代の終わりに心理学と記号論との接点で整備された。英語のgestureという語は2種類の身体動作をさしている。第1が「標識（エンブレム）」と呼ばれる部類で、ある文化内で特

異的に意味が定まった、1語で置き換えられる符丁のことである。日本でよく見られるのは、小指を立てて「女」を表すことである。第2が「例示子（イラストレーター）」と呼ばれる部類で、発話に随伴しその意味内容を補助的に例示するものとされた。

身ぶりを言語に従属する補助的チャネルとして捉えた上記のような枠組に鋭い批判を突きつけたのがアメリカの心理言語学者マクニールであった。彼は、身ぶりと発話は心という単一のシステムから発生し相互に影響を与えあう自律的な活動である、という考え方を精錬した。身ぶりを言語への寄生体とみなす従来の偏見を覆した功績は大きいが、マクニールが自らの野心を「心を読む」という標語に託したことに象徴されるように、心理言語学的なジェスチャー分析の目的は、心の内部で表象の処理が進行する認知過程を微視的に解明することなのである。身ぶりがいかに自然環境や社会関係と関わりあっているのかという問いかけはここからはみごとに欠落している。

2 狩猟採集民グイの身ぶり

この節では人類学的な身ぶり研究が進みうる異なった方向性を紹介する。その方向性とは、身ぶりから湧き出る意味を、一方では生活世界の民族誌的特質と関連づけ、他方では通文化的に普遍的な行動傾向の一環として理解することである。

グイ・グイ語・語り

グイ（|gúi）とは、ブッシュマンと総称されるカラハリ砂漠に住む狩猟採集民の一集団である。中央カラハリ動物保護区内でほぼ自給自足的な狩猟採集生活を送っていたが、1979年よりボツワナ政府の施策によって保護区西端のカデ地区に定住するようになった。1997年には、再定住化計画によってカデから70km西に離れたニューカデに移住し現在に至る。

グイ語を含むコイサン諸語にはクリック子音という珍しい音韻がある。歯音[|]、歯茎音[！]、口蓋音[ǂ]、側音[||]という4種類のクリック音と13種類の伴奏音が結合し、52種類のクリック子音を産出する。基本文型は主語＋目的語＋述語の構造をもつので、日本語とほぼ対応できる。語りの分析は調査助手T（推定生年1965年）とC（同じく1961年）に助けられた。2008年8月6日に、定住化以前に経験した出来事をTが約80分間語り、彼の右隣にすわったCがときおり口を挟んだ。思春期の少年だった自分たちが原野で重ねた狩猟の経験をTは生き生きと語った。語りの大きな特徴は、一人称としてTが男性双数のitsibi――つまり「おれたち二人」（「おれたち」と略記）――を用いたことである。この人称代名詞の選択は、父方平行イトコ（グイの親族名称では「兄弟」）の関係にあるTとCが、語られた出来事を共に体験したことを反映している。分析の素材として次の5つの出来事を選んだ。

J：ジャッカルを殺したら、そいつの乳房は犬のようだった。ナイフで切り裂いたが、犬の内臓を抜いているようで、おれは気持ち悪くなって吐いてしまった。

D：ツェー〔|kee大型の羚羊オグロヌーのこと〕を解体し骨髄を取り出して食べた。肉を担いで夜の闇の中を歩いた。木の根元で仰向けになって休んでいると連れていた犬たちが吠えたので、「パーホ（咬むもの＝猛獣）がいる」と思って怯え、肉を背負って逃げた。

O：ミミズクの巣を見つけた。抱卵している母鳥は動かなかったので、Cは死んでいると思いこみそっと持ち上げたら、逃げてしまった。

M：おれたちは遠くに見える異様な姿に怯えた。年長の男が、自分の斃したツェーの胃袋の中の液体（糞）を飲んでいたのだ。「あんたは人間か？」と呼びかけると「おお、おれは人間だあ～」と応じた。胸をなでおろして近づいたら、彼はおれたちに肉を分けてくれた。

W：べつの年長の男がツェーを仕留めようとしたが逆襲され、灌木の下に逃げこんで助けを求めた。おれたちはそれを目撃したが怖くて逃げ帰ってしまった。

身ぶりの意味作用

日本語の「頭を掻く」のように、ある所作や姿勢が慣用句として言語表現のなかに定着しているとき、それを「身体イディオム」と呼ぶ。Tの語りにおいても、こうしたイディオムとして解釈できる身ぶりがあった。なかでも、顔や胸への自己接触は明らかに慣用句化された意味を担っている。たとえば、人さし指を唇の下にあてて「思い迷う」さまを表したり（図1a）、胸もとにあてて「心の痛み」を表したりする（図1b）。胸もとを掌で押さえることは日本語の「胸がどきどきする」というイディオ

図1　イディオム化された身ぶりとしての自己接触
顔や胸もとへの自己接触は、ためらい、悩み、戦慄、驚愕などを表す。

図２　類像的な身ぶりにおける「登場人物の視点」と「観察者の視点」
a～cは登場人物の、d～eは観察者の視点からなされている。

図３　類像性の深淵
aの掌は窪みを表しているのかもしれない。bの身ぶりは獲物の腹を切り裂く動作の単純な模写ではない。

ムに対応する（図１c）。さらに、口を掌で塞ぐ身ぶりは驚愕を表わすイディオムである（図１d）。文化特異的とみなされがちな身体イディオムのかなりの部分が普遍的な共通感覚に基づいているのではなかろうか。この可能性は今後もっと吟味されてしかるべきである。

身ぶりがイディオム化されていなくても、そこから指標性と類像性という記号的な意味作用を感知できることが多い。指標性の端的な例が「指さし」である。人さし指から射出される指向線は、身体と対象とのあいだに隣接関係をつくりだす。一方、身体化された想像力のもっとも根底的な能力は、異なる事象のあいだに類似性を見出すことである。身ぶりの形態は、森羅万象との間にコードに制約されない融通無碍な類像性を生成する。

身ぶりの類像性を理解するうえで、マクニールが提案した「観察者の視点」と「登場人物の視点」という区別は便利である。〈人が走る〉（図２a）、〈獲物の脚の骨から骨髄をつまみ出して食べる〉（図２b）、〈肉を担ぐ〉（図２c）といった動作を再演することは登場人物の視点からなされているのに対して、〈２本の木が並んで立っている〉さま（図２d）や〈ツェーが茂みの周りを回る〉さま（図２e）を表す身ぶりは観察者の視点からなされている。

だが、身ぶりの形とある事象との間の類似性はいつもたやすく直観されるわけではない。Jの出来事の冒頭で、Tは「カレでツェーたちを見つけた」と発話しながら、両掌を広げた形をつくった（図３a）。カレとは、太古の湖底跡が平坦な草原になっている場所の地名である。私はこの両掌が小さな「窪み」をつくっていることに気づいた。これは雨季に水が溜まる岩盤の穴を類像的に表しているのではなかろうか。明確な意味を同定できなかった小さな身ぶりにも、私には感知できない類像性が潜んでいる可能性がある。

また、このあとTは「[ジャッカルの腹を]で、ほら切る」と言いながら、右手刀の小指部分を左掌の中指と薬指の隙間に入りこませ、静かに手首のほうへ引いた（図３b）。実際に獲物の腹を割く動作を思い浮かべよう。人は右手でナイフを握り、左手で獲物の腹の皮をつまみあげるだろう。右手それ自体はナイフではないし、左手もまた刃を受けとめる台ではありえない。「右手＝刀／左手＝台」という形は〈獲物の腹を割く〉こととそれほど似ていないのだ。類像性とは単純な模写に還元されるわけではなく、身体と世界との間のより抽象化された関わりを表現しているのである。しかもその抽象化は逆に関わりのなかに潜むリアルな特性をも浮かびあがらせる。右手刀の小指部分は、柔らかい皮を走る切れこみにも似た、左手の指の根元の隙間に刺し入れられたのである。

身ぶりの交わりと協働

身ぶりは語り手の身体の周りに閉じられているわけではない。出来事Oで、CはTの右手の親指をミミズク

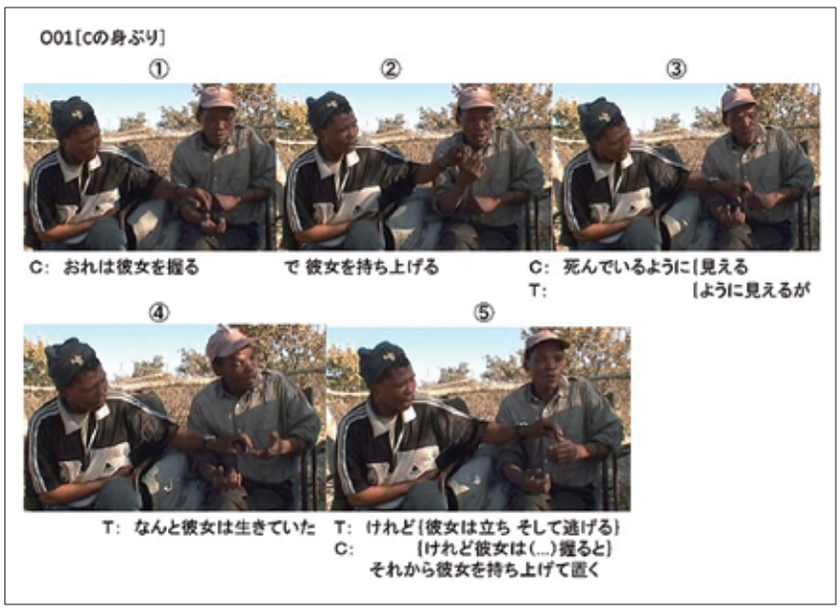

図４　他者の身体を身ぶりのリソースとして利用する
C(左)はT(右)の手をミミズクに見立てている。

図５　身ぶりのみごとな同調
aでは「今ここ」からは見えない環境(虚環境)を２人はいっしょに覗きこんでいる。bでは、互いに目を向けていないのに、期せずして同形の身ぶりを行っている。

に見立て、〈そっとつまみ上げる〉ことを演戯している（図４）。しかも①でCが左手を伸ばすと、あたかもCの企てに協力するかのようにTは自分の親指を立てた。そのあと、Cは③で今度はTの左手の親指をつまもうとするが、④でTが小さな手ぶりをしたために「取り逃がして」しまう。だが、⑤では再びTの親指をつまむことに成功する。身ぶりは自らの表現のリソースとして他者の身体を自在に利用するのである。

TとCの身体が丸ごと過去の出来事に投入されている様子は、手ぶりが起きていない部分においても顕著であった。彼らが今すわっている場所から見えるのは、見慣れた日本人キャンプの庭にしかすぎない。だが、その現実の風景の向こう側に彼らは虚環境を立ち現われさせ、驚きと恐れに満ちて身を乗り出し、その奥を覗きこむ（図５a）。出来事Mの最後では、彼らの肝を冷やした年長者は、気前よく肉を分けてくれた。驚くべきことに、TとCは互いに視線を向けていないにもかかわらず、〈足もとにある肉を取り分ける〉ような身ぶりを同時に行った（図５b）。「今ここ」の場に立ち現われた出来事に全身を投入することによって、２人の身体はおのずから同一の理解を共有したのであろう。

4　表情をおびた身ぶりとしての言語

第１節でふれたメルロ＝ポンティは、会話は表象の伝達ではなく、口頭言語それ自体が表情をおびた身ぶりであるという、一見破天荒な考え方を提示した。身ぶりと言語の間に根源的なつながりがあることは、脳神経科学の特異な症例が証し立てている。イアンは17歳で罹患した病気がもとで求心神経に壊滅的な損傷を蒙り、首から下の自己受容性を完全に喪失した。自己受容性とは身体のあらゆる部位から脳に送られる触覚・痛覚・冷温感覚のことである。自己の身体を内部から把握するこの感覚系があればこそ、私たちは無意識的に運動と姿勢を制御できる。イアンは視覚で手足の運動を探知し意志の力で統御することによって日常の動作を回復した。だが、彼は、会話するときには無意識的に自然な身ぶりを発するのである。身ぶりは言語的思考と不可分な運動として創発しているのだ。

人類学の視角によって明らかにしうる身ぶりの意味とは、生活世界の民族誌的な文脈のなかで、身体が他の身体や動植物や道具と直接的に切り結ぶことによって、言語的思考の手前でつかみとっているものであるに違いない。身ぶりによって照らされるそのような意味世界を究明することこそが、言語の根底に潜む沈黙の経験を了解する途を拓くだろう。

＊紙数の制約で参照文献を挙げることができない。本稿で参照したすべての文献は以下の拙編著に網羅されているので参照されたい。菅原和孝編『身体化の人類学 ―― 認知・記憶・言語・他者』(世界思想社、2013年3月刊行予定)。